

■帝王賞 (JpnI) アラカルト (過去全 46 回の分析)

- ※第 1 回 (昭和 53 年) から第 8 回 (昭和 60 年) までは 2,800m で実施
- ※第 9 回 (昭和 61 年) からは中央競馬招待競走として実施
- ※第 18 回 (平成 7 年) からは指定交流競走として実施
- ※第 20 回 (平成 9 年) からはダートグレード競走として実施
- ※第 15 回 (平成 4 年) は 2 頭が 1 着同着だったため、優勝馬は 47 頭、2 着馬は 45 頭
- ※第 9 回 (昭和 61 年) は 2 頭が 3 着同着だったため、3 着馬は 47 頭
- ※記録は令和 6 年 6 月 12 日時点

■ 1 番人気馬と 2 番人気馬の差に注目

単勝 1 番人気馬は 13 勝、2 着 12 回、3 着 6 回で、3 着内率が 67.4%、単勝 2 番人気馬は 10 勝、2 着 6 回、3 着 3 回で、3 着内率が 41.3%、単勝 3 番人気馬は 7 勝、2 着 8 回、3 着 8 回で、3 着内率が 50.0%となっている。単勝 1 番人気馬と単勝 2 番人気馬の 3 着内率差が大きい点に注意するべきかもしれない。

■ 上位 3 番人気以内の馬が 1~3 着を占めた例は思いのほか少ない

過去 46 回のうち 30 回は、単勝 3 番人気以内の馬が勝利を収めている。なお、単勝 3 番人気以内の馬によるワンツースリーフィニッシュ決着は第 34 回 (平成 23 年)、第 35 回 (平成 24 年)、第 43 回 (令和 2 年) の 3 回だけである。

■ 昨年と一昨年でメイショウハリオが史上初の“連覇”を達成

帝王賞において 2 回以上の優勝経験がある馬は、第 11 回 (昭和 63 年) と第 14 回 (平成 3 年) を制したチャンピオンスター、第 31 回 (平成 20 年) と第 33 回 (平成 22 年) を制したフリオーソ、第 36 回 (平成 25 年) と第 38 回 (平成 27 年) を制したホッコータルマエ、第 45 回 (令和 4 年) と第 46 回 (令和 5 年) を制したメイショウハリオと、これまでに 4 頭いる。なお、2 年連続で優勝を果たしたのはメイショウハリオだけだ。

■ 牝馬は 4 勝、外国産馬は優勝例なし

牝馬の優勝例は、第 5 回 (昭和 57 年) のコーナールビー、第 19 回 (平成 8 年) のホクトベガ、第 23 回 (平成 12 年) のファストフレンド、第 26 回 (平成 15 年) のネームヴァリューと、これまでに 4 例ある。なお、外国産馬は第 21 回 (平成 10 年) でバトルラインが、第 23 回 (平成 12 年) でドラルアラビアンが 2 着となったものの、まだ優勝例はない。

■ 4～6歳の馬が中心

馬齢別の勝利数を見ると、4歳が14勝、5歳が14勝、6歳が13勝、7歳が5勝、8歳が1勝となっている。なお、馬齢が7歳以上だったにもかかわらず優勝を果たしたのは、現在のところ第37回（平成26年）のワンダーアキュートが最後である。

■ JRA 勢が一步リード

中央競馬招待競走となった第9回（昭和61年）以降の計38回に限ると、地方所属馬は14勝、2着12回、3着18回、JRA所属馬は25勝、2着25回、3着21回となっている。3着以内馬延べ115頭に対する割合で示すと、地方所属馬は38.3%、JRA所属馬は61.7%だ。

■ 騎手別の歴代最多勝記録は「5」

騎手別の勝利数を見ると、5勝の武豊騎手が単独トップ。高橋三郎騎手、的場文男騎手が3勝で2位タイとなっている。

■ 調教師別の歴代最多勝記録は「4」

調教師別の勝利数を見ると、4勝の川島正行調教師が単独トップ。秋谷元次調教師、朝倉文四郎調教師、岡田稲男調教師、西浦勝一調教師、松田博資調教師が2勝で2位タイとなっている。

■ 8枠は健闘しているものの15～16番は未勝利

枠番別勝利数を見ると、3枠と8枠（各9勝）がトップタイ。6枠（7勝）が単独3位となっている。また、馬番別勝利数を見ると、4番（7勝）が単独トップ。1番、3番、6番（各5勝）が2位タイ、8番と10番（各4勝）が5位タイだ。ちなみに、優勝馬が出ていない馬番は15番と16番だけである。

<伊吹雅也>